

中井だより

中井やまゆり園

三度目の中井やまゆり園

生活第三課長 有泉 淳

昨年4月に中井やまゆり園に転入し、“らっかせい”で仕事をしていました。この4月から生活第三課長になりました、有泉と申します。改めて、よろしくお願いします。

平成2年に神奈川県福祉職に採用されて、当時の中井やまゆり園1寮に配属されました。再整備前は4人の部屋がいくつもあり、ひとつの寮は、50人が定員だったかと思います。時間がゆっくりと流れて、“大食堂”での食事や車いすの利用者も入りやすくした寮内浴室での支援、“遠足”や“地区の運動会”に付添ったことなどを思い出します。二度目は平成14年に、泉寮のオープンのタイミングで異動してきました。夜勤を含めて利用者の皆さんと生活を共にするというよりは、当時始めたばかりのシャープペンを組み立てる受注作業などの日中活動を支援するほうが中心でした。

平成の初めは、施設の中で“利用者を保護して指導する”ことが職員に求められていました。地域作業所やグループホームができ始めてはいましたが、数も少なくご家族が立ち上げた事業所が多かったようです。それから35年近くが経ち、“施設への措置”から事業所との契約になるなど、知的障害のある方たちに対する支援の考え方は大きく変わったと思います。特に意識をする必要性を感じたのは、“3年先、5年先を意識して利用者の幸せを考えること”や“地域の人たちに名前を覚えてもらう関わりをすること”でした。確かに少しずつではありますが、昨年度らっかせいで外に出かけているうちに、バスに乗ることや園の外で活動することに慣れていったと思います。新型コロナウイルスの影響もあり、外に出る機会が極端に減っていたやまゆり園の皆さんでしたが、まず外に出てみることの大切さを痛感しました。

長い目で見ると、外部の事業所に通う方も増えてくるかとも思います。そのために、今何をすることが大切なのかを考えつつ、日々の支援では“命を守る”ことは最低限のこととしながら、より良い活動性のある毎日を提供することが求められています。園から外に出て、地域の方たちや他の事業所の職員との交流をしつつ、利用者の皆さんからの“サイン”に注意を傾けながら、安心した生活がこの中井やまゆり園で送れるように力を注いでいきたいと思っています。